

## 第1報告 福島地域における現状

桜の聖母短大 ○佐藤美枝子

日本女大家政 沖田富美子

目的 近年地方都市においても集合住宅居住が一般化し、大都市圏と同様の生活が展開されている。中でも日常の近所づきあいの仕方も、当然変化しているものと思われる。そこで地方都市におけるつきあいの現状を把握し、今後の集合住宅居住とつきあいの方向性を探り、集合住宅計画の一資料を得ることが本研究の目的である。

方法 福島市及び福島市郊外における集合住宅居住者を対象に、その居住者の家族及び近所づきあい（つきあいに対するイメージ、つきあいのきっかけ・種類・内容、町内会、管理組合などへの参加など）についてのアンケート用紙を戸別訪問により配付、回収する方法とした。調査期間は1994年10月～11月。配布数250件で、有効回収数217件（78.0%）。

結果 ①調査対象地域の集合住宅は賃貸61.3%、分譲38.7%であり、住宅形式は片廊下型が81.0%を占める。家族構成は核家族が59.3%あり、平均家族人数は3.1人である。②現住宅への居住のきっかけは、分譲の場合「転勤の為」「子どもの成長」各約20%等、また「持家購入として」75.7%がみられ、賃貸の場合「転勤の為」62.1%、しかも将来「転居する」という世帯が全体で48.8%ある。③現在一般的に行っているつきあい（9種類のうち）としては、「冠婚葬祭などは出席」あるいは「家族ぐるみでのつきあい」などである。④集合住宅での居住者のつながりは、「共同の利益を守るため重要」と認識しているものが多いが、現在の近所つきあいは「たまに立ち話」「顔があえば挨拶」等にみられる。⑤町内会への加入は72.1%を占め、その内34.4%のものが世話役を経験し、さらに59.2%のものが町内会への参加は、親睦を高めると評価しており、比較的つきあいが行われている。